

村島宮の首遺跡

I 調査の概要

1. 調査名 村島宮の首遺跡 4次調査
2. 所在地 大洲市菅田町村島
3. 調査期間 平成29年5月17日～（継続中）
4. 調査面積 約73 m²
5. 調査体制
調査主体：大洲市教育委員会
調査指導：下條信行 愛媛大学名誉教授（考古学）
6. 調査の目的

本遺跡出土と伝わる多数の資料が、市内の個人・団体から寄贈されたことから、遺跡の範囲の確認、遺跡の具体的様相の解明などを目的として調査を実施しています。今年度はB区を中心に遺構の詳細調査などを実施しています。

II 村島宮の首遺跡とは

1. 遺跡の発見と調査

村島宮の首遺跡は、昭和の初めに地元郷土史家らによって発見され、石斧や石斧未成品（製作途中の失敗品）などが多数採集されました。これらは國學院大学の樋口清之氏によって学会に発表され、石斧や石鏃などの「石器製作遺跡」と指摘されています。

昭和40年には発掘調査が実施され、多数の遺物のほか、住居跡内に焼土や石組みの炉跡、柱穴などが発見されたとの記録があります。その後の『愛媛県史』では、本遺跡は弥生時代中期後葉（約2,000年前）の遺跡で、打製石斧の製作跡である可能性が高いとされています。

2. 製作された石器

これまでの調査で、本遺跡で製作されたと考えられる石器には、**緑色玄武岩**を使った石斧類と、**赤色珪質岩**を使った小型石器類があることが分かってきました。

緑色玄武岩製の石斧類には、**伐採石斧**と**板状石斧**の2種類があり、伐採石斧は全面が研磨された厚手の両刃石斧で、木の伐採に使用されたものです。本遺跡の石斧類の約2割がこの石斧です。

板状石斧は薄手で概ね短冊形を呈し、基本的には刃部のみを研磨した局部磨製石斧で、約8割を占めます。この板状石斧についてはその用途は謎で、土堀具や木工具などでの使用が考えられます。

これらの石斧類については、同形状のものが市内外の複数遺跡で出土していることが明らかになっています（図1）。直線距離にして20 km圏内の宇和盆地の遺跡でも発見されており、交易品として流通していた可能性も考えられます。



図1 村島系石斧出土遺跡の分布図

Ⅲ 調査の成果

調査箇所は、大きく4つのエリアに分け、標高約60m付近の旧三島神社周辺を「A区」、標高70～100mの旧三島神社から墓地にかけてのエリアを「B区」、標高約120m付近を「C区」、標高約130m付近を「D区」として調査を進めています(図2)。

調査方法は、トレンチと呼ばれる細い溝を複数掘削して遺構の有無・内容を確認し、遺構が確認されたトレンチでは拡張して詳細に調査を進めていく方法で実施しており、これまでに各エリアで計54箇所のトレンチを調査しています。

1. 発見された遺構

今年度調査を行っているB区の調査成果としては、「**段状遺構**」が複数のトレンチで確認され、うち2つのトレンチでは、段状遺構のほぼ全体の形状や規模が明らかになりました(図3)。段状遺構は、傾斜地を人工的に削って平坦面を作り出した遺構で、昨年度調査を行ったA区でも7箇所を確認されています。

B8トレンチでは、段状遺構のほぼ全体形状を検出することができました(図4左下)。西向きに開かれ、平面形は南端が屈折した「L」字状を呈していますが、北端は削平されているため本来は「コ」字状だった可能性もあります。長さは南北で約7.0m、奥行約1.9mを測り、壁沿いには溝があります。内部の平坦部は奥行0.6～1.3m程度で、活動に使用できる範囲としては狭いものだったと思われます。この平坦部内に柱穴になるようなピットは1基のみで、炉跡になるような痕跡も確認されませんでした。遺物は、土器類のほか伐採・板状石斧の未成品とその剥片、赤色珪質岩製の石鏃・小型刃器、その石核と剥片などが出土しています。

B16トレンチでは、段状遺構の北東端を検出することができました(図4右下)。北西向きに開かれ、平面形は端が屈折していることから、B8トレンチに近い「L」字か「コ」字状の形状になるものと考えられます。長さは検出部で約3.2m、奥行約2.4mを測ります。壁沿いには溝があり、内部の平坦部は奥行1.3～1.6m程度の狭いものだったと思われます。平坦部内ではピットが4基検出され、炉跡のような痕跡は確認されませんでした。遺物は、土器類のほか板状石斧の完形品、伐採・板状石斧の未成品とその剥片、赤色珪質岩製の石鏃・小型刃器、その石核と剥片、砥石などが出土しています。

B14トレンチでは、段状遺構のほぼ全体形状を検出することができました(図4上)。北西向きに開かれ、平面形は緩やかに弧を描いた半円形を呈しています。本来は円形だったものが前面を走る道路により一部が破壊されたとの見方もできますが、地形の傾斜角度からみると円形とするほどの平坦部は確保できなかったと推定され、当初から半円形だったものと考えられます。南東側の壁面には三日月状を呈したテラスが付属しており、このような遺構は本遺跡では初めての検出になります。長径で約8.6m、奥行は約4.0m以上を測り、壁沿いには溝があり、平坦部の範囲としては奥行3.0m以上の広い空間だったと思われます。平坦部内では32基ものピットが検出され、建替えが行われた可能性が推定できます。このうち5基には柱の痕跡(柱痕)が残っており、これらが最終段階に建っていた柱の可能性がります。北側では炭化物が分布する部分も検出されました。遺物は、土器類のほか板状石斧の完形品、伐採・板状石斧の未成品とその剥片、赤色珪質岩製の石鏃・小型刃器・石錐、その石核と剥片、砥石などが出土しています。

今回検出された段状遺構は、平面形がB8・16トレンチのように直線状を呈するものと、B14トレンチのように弧を描くものの2種類あり、いずれも壁際に溝を有しているものであることが分かってきました。これらの性格について、B8・16トレンチのように奥行きが狭く柱穴になるようなピットが少ないものについては、居住空間としては適しておらず住居跡とは考えにくいものですが、一方のB14トレンチのように奥行きが広くピットの多いものについては、居住空間としては適しておりその可能性は十分に考えられます。ただ、住居跡と断定するにはその上屋構造の検討など、慎重に判断する必要があります。いずれにしろ、出土遺物が示すようにこれらの段状遺構内では何らかの生産活動が行われた可能性が高いと考えられます。また、B14トレンチのような大型の段状遺構については、本集落内において中心的な施設だった可能性も考えられます。

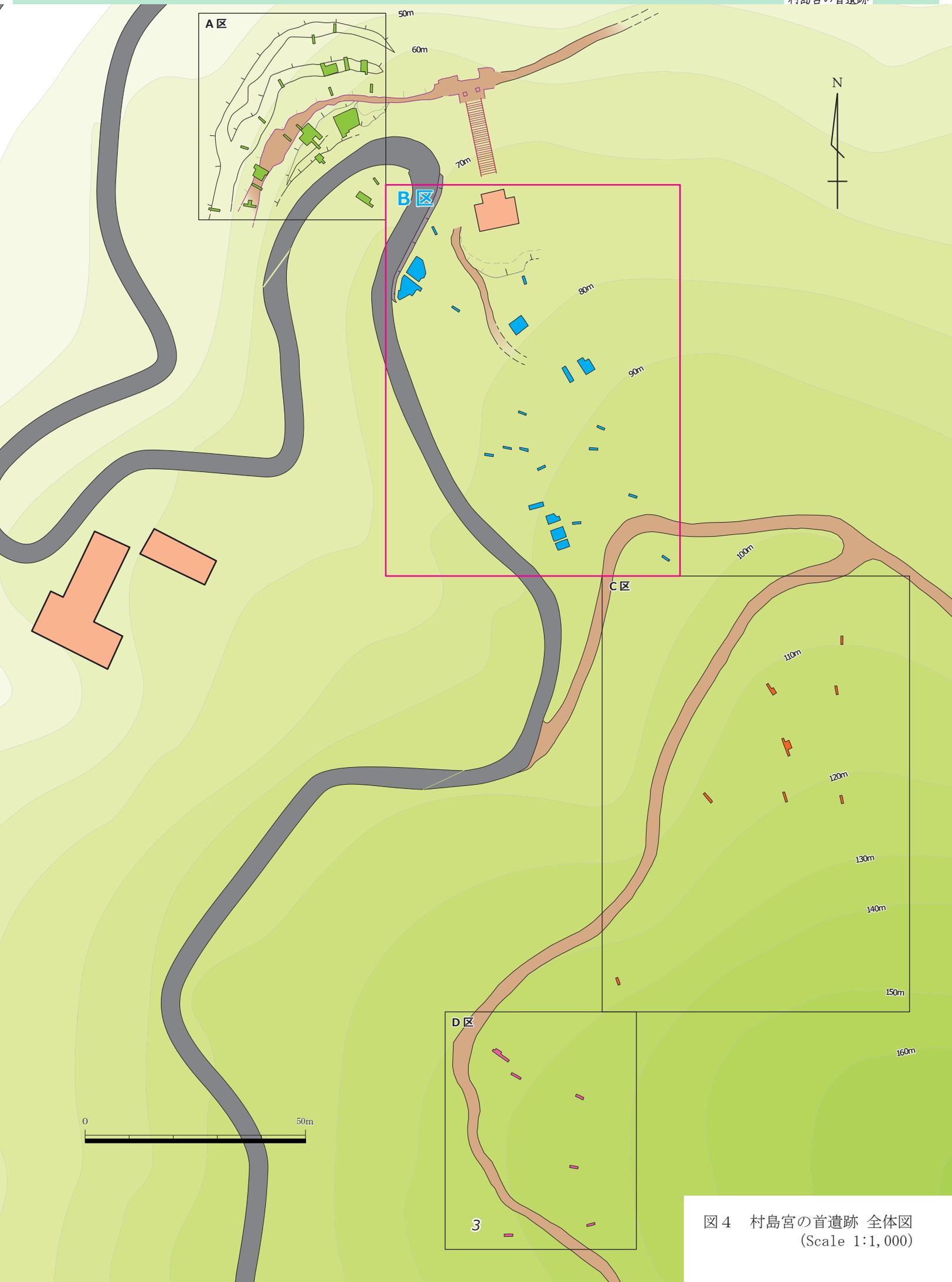


図4 村島宮の首遺跡 全体図
(Scale 1:1,000)



A-7
A-16
A-15

70m



大型の段状遺構
(B14 トレンチ)
平面形は半円形状を呈し、平
坦部内では 32 のピットが検
出されました。

柱の痕跡が残ったピット
(B14 トレンチ)
5つのピットに柱痕が残って
おりこれらは同時期に建っ
ていた柱の痕跡と考えられ
ます。

B-13



B-14

B-18

B-15



段状遺構
(B16 トレンチ)
平面形が「L」か「コ」字
形を呈した幅狭の段状遺
構です。

B-16

B-19
(調査中)



B-17



出土した柱状片刃石斧
(B17 トレンチ)
木材を加工するための斧。
本遺跡では 2 点目で、完
形品としては初めての出
土です。

90m

B-11

B-10

B-1

B-2

B-3

B-4

B-12

B-6



段状遺構
(B8 トレンチ)
壁面の上部が削平されて浅
い段状遺構となってい
ました。壁際の溝と平坦
部内のピットが検出さ
れました。

B-9

B-8

B-7

B-5



図5 村島宮の首遺跡 B区トレンチ配置図 (Scale 1:400)



図6 村島宮の首遺跡B区 トレンチ平面図 (Scale 1:50)

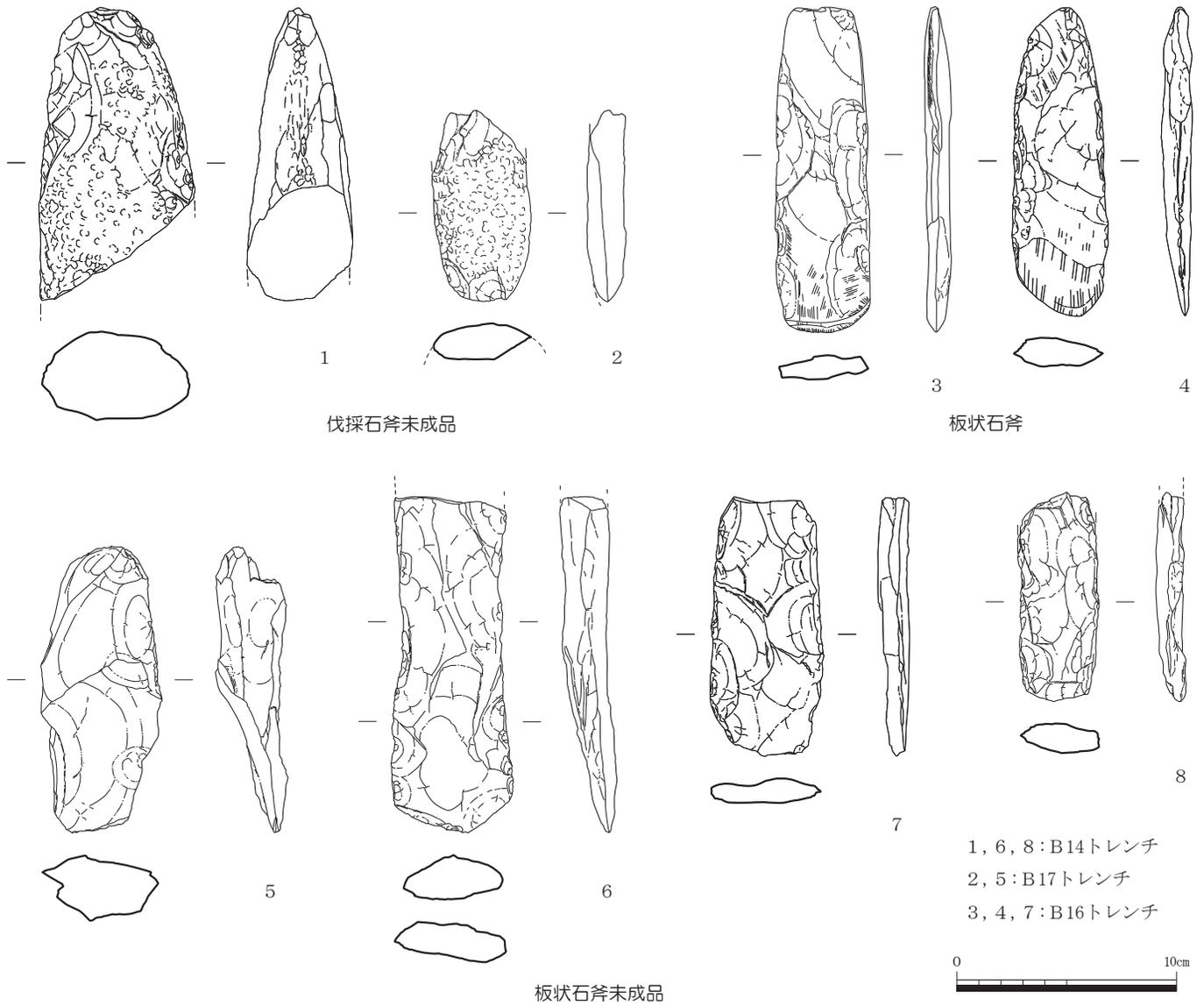


図5 B区出土の緑色玄武岩製石斧類 (Scale 1:3)

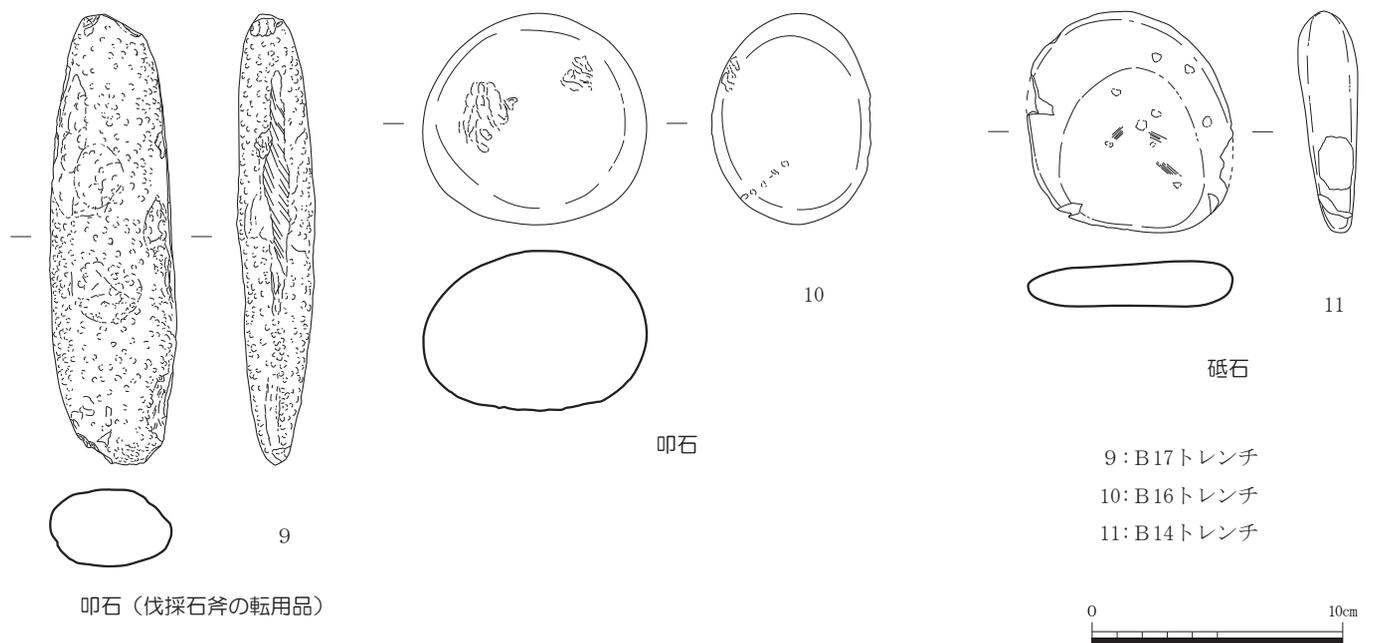


図6 B区出土の石器製作道具類 (Scale 1:3)

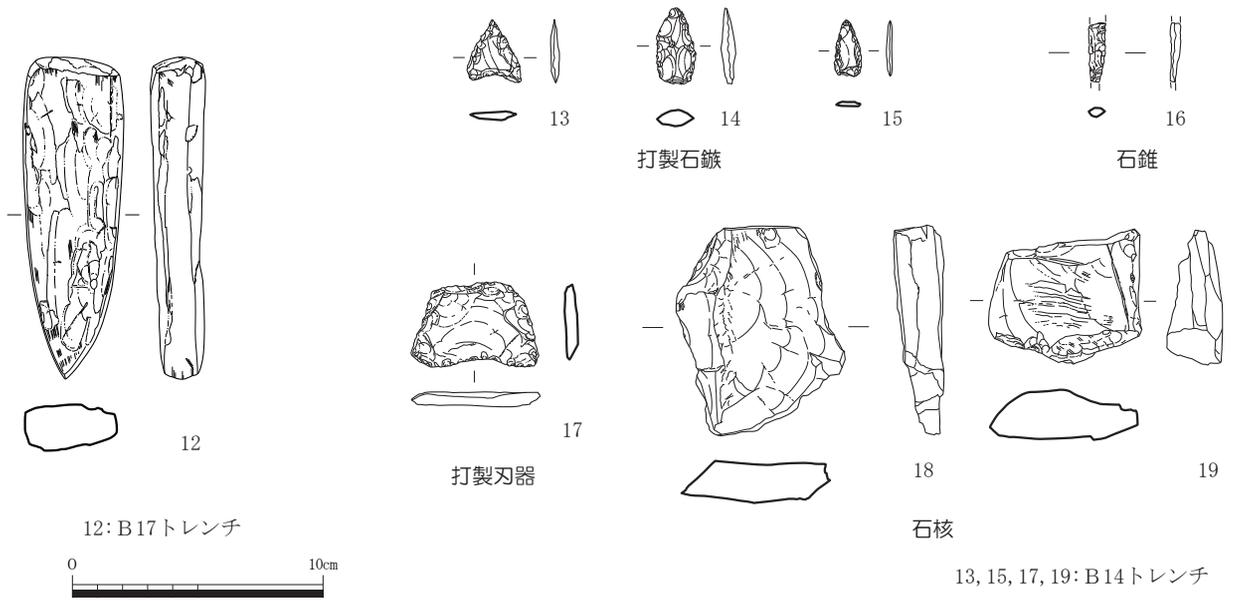


図7 B区出土の柱状片刃石斧 (Scale 1:3)

図8 B区出土の赤色珪質岩石器類 (Scale 1:3)

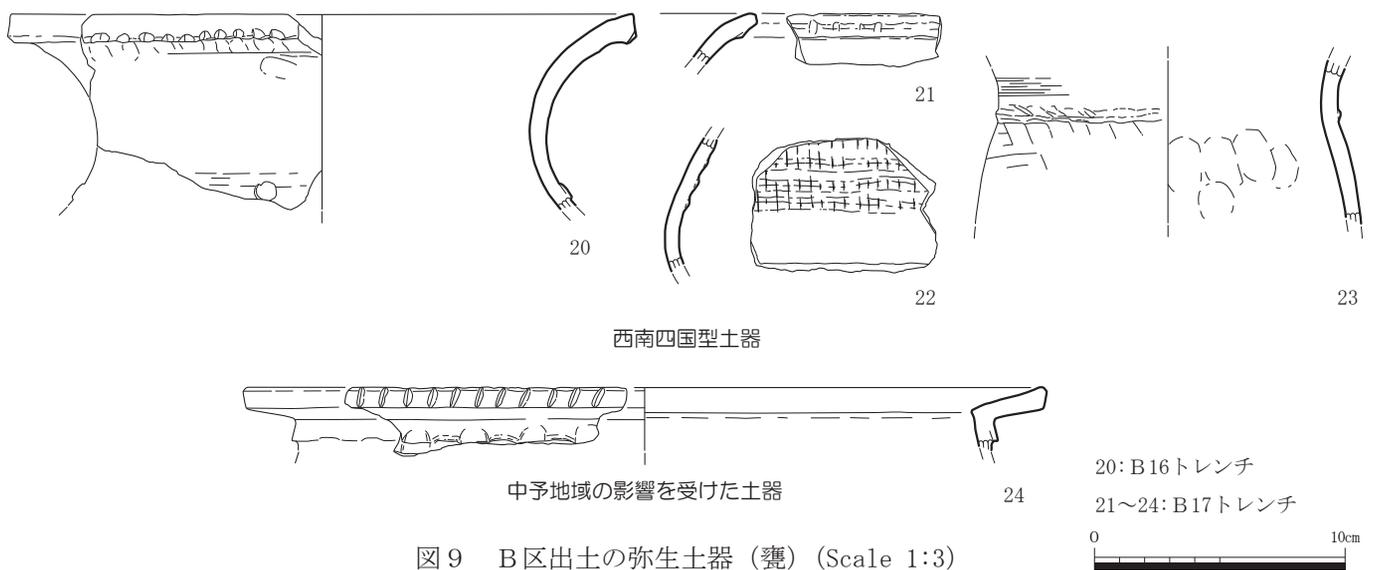


図9 B区出土の弥生土器 (甕) (Scale 1:3)

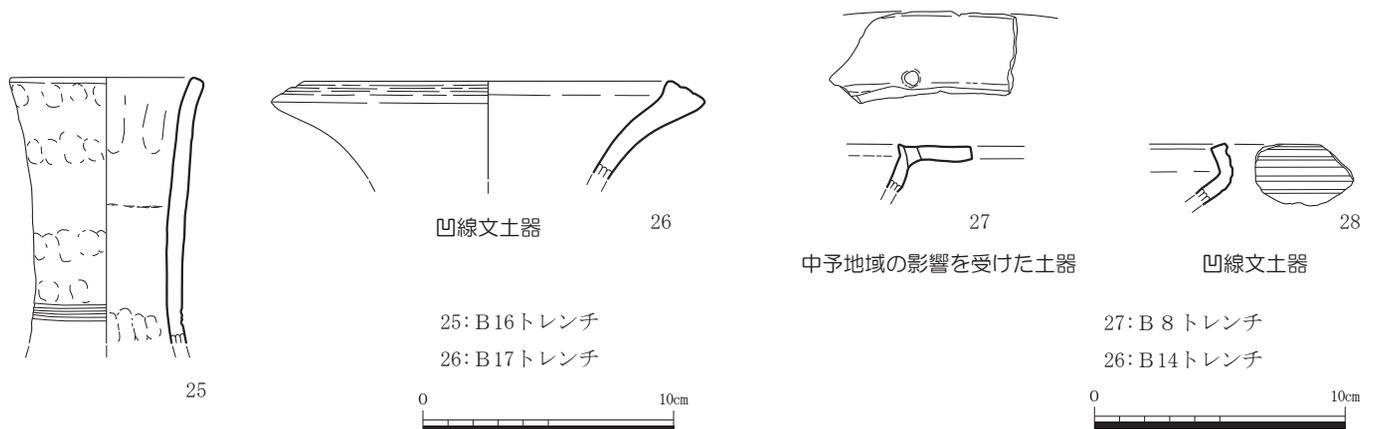


図10 B区出土の弥生土器 (壺) (Scale 1:3)

図11 B区出土の弥生土器 (高坏) (Scale 1:3)

(本页の図面類は不許転載)

2. 出土した遺物

出土遺物で特徴的なのは石器類で、本遺跡で製作されたと思われる緑色玄武岩製の石斧類(図5)と、赤色珪質岩製の小型石器類(図8)などが出土しています。緑色玄武岩製の石斧類には、伐採石斧と板状石斧の2種類があり、製作途中で破損した未成品は両者のものが出土しており、加工する際に出た剥片(石屑)なども出土しています。赤色珪質岩製の石器は、打製の石鏃、刃器、石錐などがあり、加工する際に出た剥片や石器素材を剥ぎ取った石核なども出土しています。また、これらを加工する際に使用したと思われる叩石、砥石なども出土しています(図6)。このほかには、B17トレンチからは木材を加工する柱状片刃石斧が出土しており(図7)、緑色玄武岩製石斧類の用途を考える上で注目されます。

土器類は、小破片での出土がほとんどで全体形状が分かるものは少ないのですが、甕(図9)、壺(図10)、高坏(図11)などの器種が出土しています。「西南四国型土器」と呼ばれる南予地域から高知平野以西の西南四国地域に分布する地元の土器を中心としていますが、中予地域などの他地域の影響を受けた土器の一群も見出すこともできます。なかでも「凹線文土器」と呼ばれる瀬戸内海側で広く分布する土器の壺や高坏などが出土しており、凹線文土器は**弥生時代中期後葉頃**(約2000年前)に盛行するものであることから、本遺跡の年代を考える上で貴重な資料といえます。

IV まとめ

今回の調査において、段状遺構の一単位分が検出でき、その形状や規模について把握できたことは大きな成果といえ、さらにB14トレンチのような住居跡の可能性のあるものについて、本集落での居住形態を考える上で重要な発見といえます。また、A区に続きB区でも段状遺構が数多く検出され、本遺跡が段状遺構の多用された集落だった可能性が高まったといえます。段状遺構が多用された集落の姿は、一般的な平野部の弥生集落とは大きく異なり、山に営まれた集落の在り方を示している可能性があります。それが山住み集落の特徴であるからなのか、石斧製作を行った集落であるからなのかは、今後実態を解明していく必要があります。

また、石斧生産については、石斧未成品やその剥片や製作道具などの出土数も増えており、本遺跡内で石斧の製作が行われた可能性は高まっていますが、実際に石斧を製作した工房跡の発見や、石斧の材料となる石材の採集場所を特定するには至っておらず、今後解明すべき課題といえます。